



新入留学生を対象としたテーマ別オリエンテーションの実践 : A大学23年秋学期受入れの事例から

渡部, 留美

(Citation)

研究論叢, 30:111-118

(Issue Date)

2024-06-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100491466>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100491466>



新入留学生を対象としたテーマ別オリエンテーションの実践 —A 大学 23 年秋学期受入れの事例から—

渡部 留美
(東北大学)

はじめに

日本における高等教育機関に在籍している外国人留学生¹⁾数は、2022 (令和 4) 年度外国人留学生在籍状況調査 (日本学生支援機構 2023)によると、2022 年 5 月 1 日現在 231,146 人となっており、コロナ禍により 2019 年の 312,214 人をピークに減少傾向が続いている。2023 年 5 月に新型コロナウイルス感染症が「2 類相当」から「5 類感染症」になったことに伴い、大学等が一斉に留学生受入れを再開したことにより、今後は回復していくものと思われる。留学は自国では得ることのできない知識や能力の習得を目指し、異なる言語・文化背景のなかで視野や将来のキャリア選択肢を広げる若い世代にとって貴重な機会である。横田・白土 (2004) は、留学生は、語学学習、専門分野の教育・研究、交流、青年期の発達課題、生活環境への適応、経済的自立と安定という多様な側面に渡り課題を抱えていると述べている。留学生といっても出身国・地域、年齢、課程・身分²⁾、専門分野、留学目的など多岐にわたっており、非常に多様である。英語で学位取得が可能なコース、海外の学術交流協定校から単位取得目的で 1~2 学期間在籍する交換留学プログラム等の増加により、日本で生活するうえで日本語能力が充分にない学生、日本文化や社会について知識を充分に持たずに来日する学生が増えている。

さらに、近年、DEI (Diversity, Equity & Inclusion: 多様性、公正性、包摂性) の推進が日本企業や大学において採用されるようになってきた。平成 28 年 4 月に施行された障害

者差別解消法 (平成 25 年法律第 65 号) 及び令和 3 年 6 月に交付された改正障害者差別解消法 (令和 3 年法律第 56 号) によって、国公立、私立を問わず、すべての大学等において不当な差別的扱いの禁止及び合理的配慮の不提供の禁止が法的義務となったが、合理的配慮を必要とする留学生に対する対応も必要となっている。

このように以前にも増して留学生の属性やニーズの多様化が進んでおり、留学生に対しては、きめの細かい支援、予防的支援 (Romano & Hage 2000)、予防的アプローチ (横田・白土 2004)、二次的な支援 (宇塚・岡 2015) が不可欠であろう。

本稿では、これらの支援要素を含む、早い段階から留学生が快適な留学生活を送れるようになるためのプログラムについて、A 大学で実践している新入留学生向けテーマ別オリエンテーション「Welcome Week」の報告をおこなう。具体的には、2023 年秋入学留学生向けに実施した対面による実践について概要紹介及び参加学生へ行ったアンケート結果について報告する。

1. A 大学の留学生と支援の必要性

A 大学は、地方都市にある国立大学法人で、10 の学部、15 の大学院を擁する総合大学である。留学生は、2023 年 10 月現在 2,205 人、うち、博士課程 836 人、修士課程 704 人と大学院生が 7 割を占める。出身は、中国が 6 割で最も多く、インドネシア (5.4%)、韓国 (3.5%)、台湾 (3.3%)、タイ (2.9%) と続く。4 つのキ

キャンパスに分かれており、キャンパス間は、歩くとそれぞれ20～30分程度かかる。理工系が多くあるキャンパスには5割、人文社会系や教養教育系機構のあるキャンパスには3割、医歯学系のあるキャンパス、大学本部・研究所のあるキャンパスにはそれぞれ1割の留学生が通学している。

A大学では、4年に1回の頻度で留学生を対象とした学生生活調査をおこなってきた。この結果をもとに、留学生支援の戦略を立て、サービスの充実化や制度の改善をおこなっている。2020年度に実施した調査³⁾では、主に以下のようなことが明らかになった。1点目は、日本人学生の友人の数の少なさである。学内の日本人の親しい友人が0人と回答した割合は43%に上り、1～4人と回答したのは50%であった。それは、どの日本語のレベルの学生においても同じ傾向がみられた。一方で日本人学生と交流を希望するかと問うた質問に対し、9割以上が「強くそう思う」、「そう思う」と回答し、多くの留学生が日本人と親しくしたい・なりたいたいにも関わらず、実現には至っていないことが浮き彫りとなった。

2点目は、悩み事や心配事の相談相手についてである。学業にかんする相談相手は、図1のとおり、留学生および受入れ・指導教員に相談する割合が高かった。生活上の相談相手の多くは、留学生や家族であった。この結果から、多くの留学生が留学生活中頼りにするのは、同じ留学生であり、留学生同士のネットワークの有無が重要であることがわかった。学業については受入れ・指導教員が相談相手として選択されるケースが多いことから、指導教員との良好な関係の構築が不可欠であるといえる。学業、生活とも留学生の3割が日本人学生を相談相手として選択しているが、チューターや研究室の先輩、同級生など日常的に相談しやすい相手を見つけておくことも必要であろう。

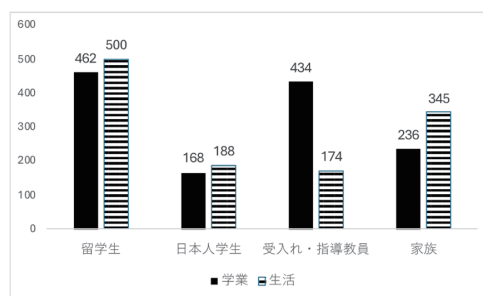


図1 悩み事や心配事の相談相手

3点目は、クラブ・サークル活動への加入についてである。加入状況は留学生の身分によって大きく異なっており、学部生の3割、交換留学生の6割が加入していた。加入していない学生にその理由をきいたところ、学部生は、2割が言語の問題のため、交換留学生は、3割が入り方が分からないからという回答であった。これらの結果から、クラブやサークルに入りたくても入り方が分からない、もしくは言語（日本語）が壁になっていて入れない、と考えている留学生がいることが明らかになった。

以上の留学生学生生活調査の結果を踏まえ、大学側としては、入学初期の段階で先輩留学生、日本人学生、同時期に入学する留学生に接触する環境を提供することが重要であると考えた。そういった環境のもと、留学生がネットワーク構築、ソーシャルサポート獲得をすることにより、自律した留学生活がスムーズに送れるようになることが期待できる。A大学では、全留学生を対象とした総合的なオリエンテーションは、一度に新入留学生を収容できる会場の確保が困難であること、事務の省力化などの事情から、コロナ禍を機にオンデマンド化されている。動画資料はいつでも自由に繰り返し視聴できる反面、上述したソーシャルサポートを得られる人々と知り合うことはできない。また、日本語、日本文化について知識が充分にない留学生に対しては、

できる限り早い段階で情報を提供し、適応していくよう支援する必要がある。

2. Welcome Week とは

A 大学で実施されている「Welcome Week」は、もともと、増加傾向にある英語で実施されるプログラムの留学生が日本での生活に早い段階から馴染めるように、2017 年から提供されていた「サバイバル日本語講座」（島崎ら 2019）が発展したものである。上述したとおり、多様化する留学生の現状や学生生活調査の結果から明らかになったニーズに対応すべく、内容の追加・改訂を進めてきた。「Welcome Week」の特徴は次のとおりである。多様化する留学生の個々のニーズに基づいた設計となっていること、新入留学生同士だけでなく、日本人学生、先輩留学生とつながる場の提供をおこなっていること、理解が深まるよう提供プログラムを少人数制（20～100 人程度）で対面により実施していることである。

実施にあたっては、A 大学の 4 つのキャンパス全ての学生が参加しやすいよう、できるだけ多くのキャンパスで提供することを心がけ、内容によっては、専門家に依頼をおこない、講義や資料を提供してもらうようにした。

コロナ禍の 2 年間はオンラインで実施してきたが、2022 年秋学期の受入れから対面での実施を再開した。

3. 2023 年秋学期の実施報告

ここでは、2023 年秋学期に実施した内容の紹介をおこなう。提供したプログラムの日程と内容、参加人数は表 1 のとおりである。内容は、大きく、専門家・専門部署が提供するものと学生スタッフが担当するものに分けられる。

専門家・専門部署が提供するものについては、サバイバル日本語、図書館ガイダンス、キャリア支援、学生相談がある。サバイバル日本語は、A 大学で日本語の授業を担当している非常勤講師が授業をおこなっている。90 分のための、ひらがな・カタカナ、日本語の発音について学習したあと、自己紹介場面で自分の出身や専門、趣味が言えるようになるまでをおこなう。ここには、A 大学の日本人学生がボランティアとして参加し、会話の練習相手になったり、自分の名前の書き方を手伝うなど、学習のサポートをおこなう。図書館ガイダンスは、A 大学の附属図書館が担当している。図書館の学生スタッフが、図書

表 1 2023 年秋学期 Welcome Week プログラム

日	時間	内容	使用言語	キャンパス	参加人数
9/25(月)	10:30-12:00	キャンパスツアー	日本語/英語	K	14
	13:00-14:30	学生相談/キャリア支援	日本語/英語	K	2
	14:40-16:10	サバイバル日本語	日本語/英語	K	5
9/26(火)	10:30-12:00	キャンパスツアー	日本語/英語	A	25
	13:00-14:30	ゴミの捨て方/災害への備え/交通ルール	日本語/英語	K	43
	14:40-17:50	国際共修授業/日本のマナー/クラブ・サークル/SIMカード申込	日本語/英語	K	97
9/27(水)	10:30-12:00	図書館ガイダンス	英語	K	42
	13:00-14:30	キャンパスツアー	日本語/英語	K	50
9/28(木)	10:30-12:00	キャンパスツアー	日本語/英語	A	24
		キャンパスツアー	日本語/英語	K	20
	13:00-14:30	図書館ガイダンス	中国語	K	13
	16:20-17:50	サバイバル日本語オンライン	日本語/英語	オンライン	8
9/29(金)	8:50-10:20	サバイバル日本語	日本語/英語	A	11
	10:30-12:00	ゴミの捨て方/災害への備え/交通ルール	英語	A	32
	13:00-14:30	学生相談	英語	A	15
9/30(土)	11:30-14:30	街ツアー	日本語/英語	K	110
10/26(木)	16:30-18:00	ゴミの捨て方/災害への備え/交通ルール	英語	S	2
					513

館の利用方法や図書の検索方法について説明をし、その後グループに分かれ、館内のツアーをおこなう。キャリア支援は、キャリア支援センターの教員が、日本での就職活動のスケジュールや注意点、アルバイトの見つけ方などについて講義形式で説明する。学生相談は、学内で留学生のカウンセリングをおこなっている教員が日本で快適な留学生活を送れるためのヒントや異文化適応、カウンセリングサービスについて説明をおこなう。

学生スタッフがおこなうものには、キャンパスツアー、街ツアー、各種セッション・ワークショップがある。キャンパスツアーは、留学生が多く所属する2つのキャンパスにおいて実施している。キャンパス内を歩きながら施設の説明をしつつ、留学生の質問に答えている。街ツアーは、A大学のあるB市の中心部を数人のグループに分かれ、街を歩きながら留学生に有益な場所や施設の紹介をおこなう。このグループには、学生ボランティアも参加、留学生からの質問に答えたり、おすすめスポットの紹介をおこなっている。



図2 Welcome Week 街ツアーの様子

各種セッションには、ゴミの捨て方、災害への備え、交通ルール、日本のマナー、クラブ・サークル紹介、SIMカード申し込み、国際共修授業の紹介がある。ゴミの捨て方のセッションは、市のゴミの出し方のルールの説明をおこなったあと、手作りのゴミのキットを用いた分別作業をゲーム感覚でおこなう。このセッションで、ゴミを捨てる曜日や時間が住んでいる地域によって決まっていること、燃えるゴミとその他のゴミの区別の仕方、大型ゴミの捨て方などについて学ぶ。災害への備えのセッションでは、日本で起こる可能性の高い災害である地震、台風について取り上げている。事前にある程度準備する時間がある台風については、被害を最小限に抑える方法、役に立つウェブサイトなどの提供をおこなう。地震については、日本で地震が多く発生するメカニズム、地震の規模（震度とマグニチュードの違い）、家具の配置や食料の備蓄、避難場所の確認などを伝えている。地震を経験したことのない学生は、過度に心配する傾向が強いが、これらの情報を得ることで少し安心するようである。交通ルールのセッションでは、留学生の主な通学手段である、徒歩や自転車について説明をおこなっている。自転車については防犯登録をすること、譲り受ける場合は譲渡証明書を作っておくこと、駐輪場を利用し、禁止区域に駐輪しないことなどを伝えている。新学期には自治体やボランティアによる留学生向けの自転車販売があるのでその情報も伝えている。A大学では、学生による自転車事故が多発しているため、自転車の乗り方や禁止事項、交通標識の見方などについてもクイズを交え覚えてもらうようにしている。日本のマナーのセッションは、当初はなかったが、それまでのWelcome Weekのアンケートから日本のマナーについて知りたいという意見があったことから2年ほど前から追加した。公共交通機関のマナーについて

ては、地下鉄やバス内では携帯電話で話をしないこと、バス停や地下鉄の乗降口では列に並ぶこと、など日本人にとっては当たり前のことでも留学生にとっては母国の習慣と異なるため、知っておくと日本人との軋轢や誤解が回避できることもある。さらに、大学の指導教員や先輩との接し方、温泉でのマナーなどクイズを取り入れながら説明をおこなっている。クラブ・サークル紹介は、留学生学生生活調査の結果でも示したとおり、クラブやサークルへ加入を希望する学生向けのセッションである。A 大学では大学登録団体のクラブ・サークルを対象に留学生の参加の可否を聞き、可能な場合は、条件や活動内容、活動スケジュールを回答してもらっている。それをもとに、留学生向けのクラブ・サークルガイドブックを作成し、このセッションで配布している。セッションでは、部活（クラブ）とサークルの違い、入部を希望するクラブへの連絡方法、実際にクラブに入っている留学生の体験談などを紹介している。SIM カード申し込みでは、安価で留学生に使いやすい SIM 会社の情報の提供をおこない、最後に個別に申し込み支援もおこなう。国際共修授業の紹介セッションでは、A 大学が提供している留学生と日本人学生が共に参加できる授業の紹介をおこなっている。



図3 Welcome Week セッションの様子

報告者は Welcome Week 全体のコーディネーションを行っており、スケジュール調整、場所の確保、参加者募集資料の作成、申し込み受付、学生スタッフの担当割り当て、当日の準備、セッションのフォローなどを行っている。

23 年秋学期は 10 月 1 日から後期の授業が開始されるため、その前の週の 9 月最終週におこなった。S キャンパスにある医学研究科では大学院の合格発表が 9 月にあるため、来日が 10 月後半になることから、来日時期を見込んで 1 ヶ月遅れて開催することにした。

Welcome Week の案内は実施の 1 ヶ月前からおこない、事前に申し込みを受け付けている。申し込み状況でおおよその人数を把握し、定員より大幅に超過予測される場合は優先順位の高い学生⁴⁾に限るなど、調整する。しかし、多くの留学生が渡日前に申し込みをおこなうため、来日した後で、指導教員との面談や研究室の予定が入ったりするため、参加できなくなるケースもある。そういった事情を勘案して、定員より申込数が多くても当日のキャンセルを見込み、多めに受付をおこなっている。23 年度秋は、193 人、延べ 973 人の申し込みがあり、実際の参加者は延べ 513 人であった。193 人の内訳は、91 人が交換留学生、41 人が研究生、修士課程 1 年が 20 人、博士課程が 15 人、学部生が 21 人であった。参加率はセッションや日程によって異なり、大体 3～7 割であった。

4. 参加者及びボランティア学生のアンケート結果

Welcome Week 終了後に、参加した留学生およびボランティア日本人学生を対象としアンケートをおこなった。留学生については 54 人から、日本人学生については 6 人から回答を得た。本報告で用いた調査は、報告者が所属する機関における倫理委員会の承認を得てい

る（承認番号：k00510、k00512）。

まず、留学生に対して実施したアンケート結果から報告する。どのようにして Welcome Weekを知ったか、という質問に対しては、27人が所属部局やプログラムの担当教職員から、18人が大学の英語版HPからという回答であった。報告者がおこなった周知方法は、報告者の所属するセンターのホームページへの掲載、A大学の英語版ホームページへの掲載、学内の国際交流担当者のメーリングリストへの案内等であった。直接担当者からのメールによる案内のほか、大学のウェブサイトも見ているということが理解できた。

それぞれのセッションについて5段階（1：全く役に立たなかった～5：とても役に立った）で聞いたところ、ほとんどの学生が4または5を選択しており、概ね満足のいくプログラムであったといえる。

Welcome Weekに参加した理由をきいたところ、「プログラムの内容に興味・関心があった」が45人で最も多く、次いで「日本での留学生活に必要なと思った」39人、「留学生と交流したかった」31人、「日本人学生と交流したかった」26人であった。多くの学生が留学生活に特化したプログラム内容に興味をもち、共に参加する学生と交流したいという気持ちをもっていることがわかった。

表2 参加理由（留学生）

プログラムの内容に興味・関心があった	45
日本での留学生活に必要なと思った	39
留学生と交流したかった	31
国内（日本人）学生と交流したかった	26
日本語が上手になりたかった	9
友達や先輩に勧められた	4
所属部局やプログラムの教員、スタッフから勧められた	3

このプログラムに参加して得られたものについては、「A大学についての情報を得ることができた」と「留学生と交流ができた」が41人で最も多く、次いで、「留学生と友達になれた」37人、「日本文化・社会について知識が高まった」33人、「B市を知ることができた」33人、「日本人と交流できた」32人、「日本での留学生活に自信がついた」28人であった。

表3 得られたもの（留学生）

日本文化・社会について知識が高まった	33
日本語の知識が高まった	19
東北大学についての情報を得ることができた	41
Bの街を知ることができた	33
留学生と交流できた	41
国内（日本人）学生と交流できた	32
留学生と友達になれた	37
国内（日本人学生）と友達になれた	16
日本での留学生活に自信がついた	28

次に日本人学生に対して実施したアンケート結果について報告する。サバイバル日本語クラスと街ツアーにボランティアとして参加した日本人学生は述べ30名であった。アンケートの回答者数は6人と少ないため参考程度になるが、留学生と同じく参加理由と得られたものについてきいた。参加理由は、「留学生と交流したかった」と「国際交流に興味・関心があった」が6人、「留学生の友達を作りたいかった」5人、「英語を話したかった」、「国際交流経験を積みたかった」、「留学生の日本での留学生活をサポートしたいと思った」、「ボランティアの活動内容に興味・関心があった」がそれぞれ4人であった。得られたものは、「留学生と交流ができた」6人、「留学生と友達になれた」と「一緒にボランティアをする学生と交流できた」が4人であった。

表4 参加理由（日本人学生）

ボランティアの活動内容に興味・関心があった	4
国際交流に興味・関心があった	6
留学生の日本での留学生生活をサポートしたいと思った	4
国際交流経験を積みたかった	4
留学生と交流したかった	6
留学生の友達を作りたいかった	5
英語を話したかった	4
英語が上手になりたかった	2
所属部局の教員、事務から勧められた	1

表5 得られたもの（日本人学生）

留学生と交流できた	6
留学生と友達になれた	4
一緒にボランティアをする学生と交流できた	4
一緒にボランティアをする学生と友達になれた	2
留学生について理解が深まった	2
国際経験を積むことができた	1
留学生と話をすることに自信がついた	2
英語能力が向上した	1
コミュニケーション能力が向上した	1
仙台の街を知ることができた	2

留学生は概ね、期待していたとおり留学生活に必要な情報を得られたと感じたようであった。6割が日本文化・社会について知識が高まり、5割が日本での留学生活に自信がついたことは一定の成果があったといえる。また、留学生と交流できたと回答した人数は7割以上にのぼり、このプログラムがネットワーク構築の場となっていると推察できる。留学生と交流でき（41人）、かつ友達になれた（37人）数はほぼ同数で、交流がそのまま友人形成に結びついていた。一方、日本人学生

と交流できたのが32人に対し、友達になれたのは16人と半数であった。留学生同士は友人になりやすいが留学生が日本人の友人を作ることには容易でないことが浮き彫りとなり、1で述べた学生生活調査を裏付ける結果となった。

留学生と交流したいという理由で参加した日本人学生にとっては、全員が交流できたと回答していることから、このプログラムがボランティアとして参加する日本人学生のニーズも満たしているといえる。ただし、友達になれたのは4人であったため、日本人にとっても留学生と友人になることには何らかの壁があることが推察される。自由記述で、「日本人の学生と一緒に参加できる活動がもっと多くなればいい」と留学生が書いていたが、今後は、より多くの日本人学生に参加し、交流を深められるような仕掛けが必要であろう。

5. 今後に向けて

参加留学生及び日本人学生に行ったアンケート結果からは、Welcome Week に対する評価は概して高かったが、改善すべき点もみられた。より増加、多様化する留学生のニーズに対応するため今後も改善をおこなう必要がある。

毎回アンケート結果を参考に改善を重ねているが、Welcome Week が留学生のための単なる情報取得目的のオリエンテーションではなく、参加した留学生が他の留学生や日本人学生と知り合い、友人形成をおこなう場、日本人学生にとっては、学内で国際交流を体験できる場となるよう、より一層の工夫や働きかけが必要である。

参加した留学生の半数が交換留学生であったが、これは報告者が所掌するプログラムの学生全員に案内を送っていたことも背景にある。しかしながら、A大学の留学生の3分の2が大学院生であることから、このプログラム

に参加する大学院生は少ないことがわかる。
今後は、全ての留学生に情報が行き渡るよう
周知を徹底していく必要がある。

学習・生活・心理をいかに支援するか―』ナカニシ
ヤ出版

【注】

- 1) ここでいう「外国人留学生」とは、「出入国管理及び難民認定法」別表第1に定める「留学」の在留資格による、大学等において教育を受ける外国人学生をいう。
- 2) 学部生、修士課程、博士課程、交換留学生、研究生など
- 3) 2019年12月から2020年1月にかけておこなった。留学生2103人中回答数は651人（回答率31.0%）であった。詳細は『2020年度東北大学留学生学生生活調査まとめ』
https://www.insc.tohoku.ac.jp/japanese/wp-content/uploads/2021/04/J_International_Students_Survey_2020.pdf（閲覧2024/03/15）
- 4) 定員が超過する場合は、十分なオリエンテーションがないと考えられる研究生や大学院生を優先している。

【参考文献】

- 日本学生支援機構（2023）「2022（令和4）年度外国人留学生在籍状況調査結果」
https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2023/03/date2022z.pdf（閲覧2024/03/15）
- Romano, J., & Hage, S. (2000). “Prevention and Counseling Psychology”, *Counseling Psychologist*, 28, pp.733-763.
- 島崎薫・渡部留美・渡邊由美子（2019）「東北大学における留学生入学前準備プログラムの実践報告―サバイバル日本語講座2017の事例―」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第5号、pp.247-260.
- 宇塚万里子・岡益巳（2015）「新入留学生への支援に関する実践研究」『大学教育研究紀要』、第11号、pp.183-198.
- 横田正弘・白土悟（2004）『留学生アドバイジング―